武蔵野日曜聖書講筵

天の梯

――創世記第28章10～22節――

（「活けるキリスト」149号１９７８年7月号より転載）

１９７７年5月8日
小池辰雄

石を枕に　神の殿、天の門　祈リの梯　天国を烈しく攻めん　聖霊漬け　往相還相の愛

【創世記28】

10 茲にヤコブ、ベエルシバより出でたちてハランの方におもむきけるが、
11 一処にいたれる時日暮れたれば即ち其処に宿り、其処の石をとり枕となして其処に臥して寝ねたり。12 時に彼夢みて梯の地にたちいて其巓の天に達れるを見又神の使者の其処にのぼりくだりするを見たり。13 エホバ彼の傍に立ちて言いたまわく、我は汝の祖父アブラハムの神イサクの神エホバなり。汝が臥すところの地は我之を汝と汝の子孫に与えん。14 汝の子孫は地に塵沙のごとくなりて西東北南に蔓るべし。又天下の諸の族汝と汝の子孫によりて福祉をえん。15 また我汝とともにありて凡て汝が往くところにて汝を護り、汝を此地に率返るべし。我はわが汝に語りし事を行うまで汝をはなれざるなり。

16 ヤコブ目をさまして言いけるは、誠にエホバの神此処にいますに我知らざりきと。17 乃ち畏れていいけるは、畏るべき哉此の処、是即ち神の殿の外ならず是れ天の門なり。

18 かくてヤコブ朝夙に起き其の枕となしたる石を取り、これを立てて柱となし、膏を其の上に沃ぎ、19 其の処の名をベテル（ベート・エール　神殿）と名づけたり。其の邑の名は初めはルズ（ルーズ）といえり。20 ヤコブ乃ち誓をたてていいけるは、若し神、我と共にいまし此のわがゆく途にて我をまもり、食うパンと衣る衣を我にあたえ、21 我をしてわが父の家に安然に帰ることを得せしめたまわば、エホバをわが神となさん。22 又わが柱に建てたる此の石を神の家となさん。又汝がわれにたまうものは皆必ず其の十分の一を汝に捧げん。

●石を枕に

創世記第28章10節から、

10 茲にヤコブ、ベエルシバより出でたちてハランの方におもむきけるが、

というのは、ヤコブもまた嫁さんを異民族の住むカナンの地、即ちパレスチナの地の女から娶ってはいかんという事を言われていたものですから、お父さんの住んでいたベエルシバから旅立って、リベカの兄さん、即ちヤコブの伯父さんの住んでいるところのハラン（パダン・アラム）を指して、はるばる東北に向かって出かけて行くわけです。

11 一処にいたれる時日暮れたれば即ち其処に宿り、其処の石をとり枕となして其処に臥して寝ねたり。12 時に彼夢みて梯の地にたちいて其巓の天に達れるを見又神の使者の其処にのぼりくだりするを見たり。

ひとり旅のヤコブは、日が暮れて宿る人家もなく、路傍の石を枕にして眠りました。彼はその時、未知未定の花嫁に対する希望の曙を胸に抱いて眠ったにちがいない。すると未だかつて見たことのないすばらしい夢を見ました。梯が天から地に降り立ちました。しかも天使がその梯を昇り降りするではありませんか。夢の中でどこからか霊歌が聞こえてくるようです。それがひびき終るや、

13 エホバ彼の傍に立ちて言いたまわく、我は汝の祖父アブラハムの神イサクの神エホバなり。汝が臥すところの地は我之を汝と汝の子孫に与えん。14 汝の子孫は地に塵沙のごとくなりて西東北南に蔓るべし。又天下の諸の族汝と汝の子孫によりて福祉をえん。

ヤコブは驚きました、エホバの神が夢枕に立って大いなる祝福を語り給うとは！　これはアブラハム、イサクに臨んだ神様の言葉が、またヤコブにも臨んできたわけです。父祖三代に亙る神の御護りの貴さよ！　するとエホバの言は更につづいて、

15 また我汝とともにありて凡て汝が往くところにて汝を護り、汝を此地に率返るべし。我はわが汝に語りし事を行うまで汝をはなれざるなり。

あまりにはっきりした神の声に感動のあまり、ヤコブは豁然として目を覚ましました。

「行うまで汝をはなれざるなり」

という聖言は、

「いつまでも離れないで実行するぞ」

と言うことです。15節は非常に力強い言葉です。

「いつもお前と一緒に旅をしているよ。ひとり旅といっても孤独じゃない。私が見えない路伴れだよ」

というわけです。旧約では、

「我汝と偕にあり」

という言葉が非常に力強く出てきます。例えば、モーセの出エジプトの時が正にそうでした。

●神の殿、天の門

16ヤコブ目をさまして言いけるは、誠にエホバの神此処にいますに我知らざりきと。17乃ち畏れていいけるは、畏るべき哉此の処、是即ち神の殿の外ならず是れ天の門なり。

霊感にうたれたヤコブは、神の顕現に遭い、著しい告白をしました。「神の殿」（ベート・エロヒーム）！　ヤコブはここに神殿ならざる神殿を見ました。神の現在を感じ、

「神の在すところが神殿だ」

と告白しました。これは素晴らしい告白です。そして、そこが天界への門であると直覚して「天の門」（シャアル・ハッシャーマーイム）だとたたみかけて叫びました。

18かくてヤコブ朝夙に起き其の枕となしたる石を取り、これを立てて柱となし、膏を其の上に沃ぎ、19其の処の名をベテル（ベート・エール　神殿）と名づけたり。其の邑の名は初めはルズ（ルーズ）といえり。20ヤコブ乃ち誓をたてていいけるは、若し神、我と共にいまし此のわがゆく途にて我をまもり、食うパンと衣る衣を我にあたえ、21我をしてわが父の家に安然に帰ることを得せしめたまわば、エホバをわが神となさん。22又わが柱に建てたる此の石を神の家となさん。又汝がわれにたまうものは皆必ず其の十分の一を汝に捧げん。

さて、以上の節で、

「神様が一緒にいて途を守って、食べるものと、着るものをくださって、無事に帰らせてくだされば、エホバをわが神としよう」

というのは素朴な考えです。が、もしそうでなかったら神としないということに逆になると、それは本当の信仰ではない。

「あなたはわが神であるから、必ず一緒にいてくださる。着るものも、食べるものも心配ないし、必ず帰してくださる」

というなら、即ち、

「エホバはわが牧者なり、我乏しきことなし」

という心根なら、本当の信仰の心根ですけれど、

「実績が上ったら神とする」

というなら、それは御利益信仰になる。このヤコブの言い方は、それゆえ、感心できない。しかし、言い方はそうですけれども、彼としては、とにかくこれだけの霊幻にあったので、ここにもやはりヤコブらしいガメツさが出ているわけで、彼のしがみつきの信仰の表現とみるべきでしょう。それからせっかく、

「神の現在するところが神殿だ」

という霊的な告白をしておきながら、

「柱石を立てて神の家の土台としよう」

という心根も、これがまた神殿宗教の源になる。こういう考え方は、何か記念碑的な発想で、記念碑は人間の普通の衝動だから悪いとは言いませんけれども。しかし、ここでヤコブが石に、

「膏を沃いだ」

という一点には注目したい。聖霊降臨の旧約的な徴として。しかし、キリストの

「活ける神殿」

という霊的な無神殿宗教につき抜けることを要するわけです。

それから「十一献金」のことが宣言されていますが、全存在を神に献げ、

「わが有は神の有なり」

という在り方が十分の一献金の精神でない限り、律法となることに注意すべきでしょう。

●祈リの梯

ヤコブは、しかし、

「神様は自分が知らないのに守っていてくださった」

ことに気が付いたわけです。夢に、天地が結ばれていることを示された。本当の信仰の現実は、天地一如の世界、霊界と現実界は相連なっている。祈りの現実が実はそうなのです。祈りは常に霊界とつなぐものですから。ヤコブの見た梯は我々にとっては祈りなんです。霊界、天界、絶対界の神との交わり、つながりは何かというと梯です。梯は祈りです。祈りの相を夢でみたら梯であった、というわけですよ。神の使者、天使がのぼりくだりする。

天使は実在する。イエスが言った、

「まことに誠に汝らに告ぐ、天ひらけて人の子の上に神の使たちの昇り降りするを汝ら見るべし」（ヨハネ1・51）

と。イエスはヤコブの故事をも想い見ておられたにちがいない。

私も１９５１年のクリスマスに各集会員のうしろに天使が二人ずつ立ち、私の左右と背後に七人の天使が私を囲んでいたのを一会員が見たといって歓んでくれたことがありました。そんなわけで、時に天使の姿が現われることがある。

「神の天使が小さい幼児を見守っている」

とキリストが言われた（マタイ18・10）。

祈りの世界で自在にそこに上り下りするのは神の言です。神の言は、即ち聖書の言は生きて私たちに下ってくる。祈りの中で聖句が与えられる。これは一種の天使です。神の言が降るところ、本願の成就するところ、聖意の実現するところ、そこに神殿がある。いわゆる神殿宗教ではない。神様が聖霊と聖言において現在するところ、そこが神殿なんです。祈りにおいて、天的現実において、神さま・キリストさまと話が通ずる場、それが即ち「天

の門」である。

「大道無門　千差道路　透得此関　乾坤独歩」
〔大道に門無く、千差道有り。此の関を透得せば、乾坤に独歩せん〕

と『無門関』にあるように、ヤコブの旅路はその無門の道を往く。ところがその無門の道に、山径に、野路に、曠野の道に、無門の道に天門がいつなりとも開かれる。天門は至るところにある。

「我は門なり」

とキリストは言われたでしょ。キリストが臨んでくる。今度は旧約でなくて新約、我々にとっては、祈りの世界でキリストが祈りの対象ですから。

「主よ！　主さま！」

と祈る相手はキリストですから、そのキリストが即ち、

「われは門なり」

と。主を呼ぶところに即ち天門が開かれた。

「われは天門なり」

というわけだ。またキリストは、

「我は活ける宮である。エルサレムの神殿が壊れても、私は三日で建てる」

と言った。「三日で建てる」とは、「三日目によみがえる」ということ。即ち、

「三日目によみがえった私は活ける神殿である」

と。キリストこそは活ける神殿。この活ける神殿なるキリストの聖霊を戴くと、今度は、

「我々自身が神の宮となる」

とパウロが言ってる通り、

「汝らは神の宮にして、神の御霊汝らの中に住み給う」（コリント前3・16）

ということです。キリストが神殿であると同時に、私たちがキリストのみ霊を戴いた時に、私たち自身が即ち神殿である。我々のあるところに天門が開かれる。旧約のこのヤコブの現実が、新約の光でいうと正に聖霊の現実になるのです。

●天国を烈しく攻めん

キリストの力にかなうものはないですよ。どんな事がありましても――受験、結婚、就職などが不如意の結果に終ろうと――決してへこたれない。運命、環境の幸・不幸ではありません。本当の幸いとは、自分自身が神殿になること。至る処に天門を開いて、人をその天門の中に入れること。それが使徒的信仰の現実なんです。

使徒行伝が何ですばらしいかというと、御霊が充満している世界だからです。神様が、キリストが成し給うんだから、こっちはただキリストの中に自分を投げ入れておれば働き給う。質的にそういうような根源現実に自分の魂が、存在が、生きていく事が大事なんです。

そうすれば、神様は自在に現象を現わし給う時は現わし給う。

しかし、ただ現象ばっかり追って御利益信仰になってみたり、現象を警戒して観念信仰になったり、人間の実存の側ばっかり問題にして人を審くようなパリサイになったり、霊的傲慢になったり、どれもこれもだめです。

パウロの信仰の本当の構造をつかむことは極めて大切なことです。

「畏るべき哉此の処、これこそは神の殿に外ならず」

「外ならず」、このヘブライ語の表現も非常に強い。

創世記は本当に神劇です。創世記を全部読むと、福音が全部入っています。本当にすばらしい。聖書は大ドラマですから。人に躓きのような事も書いてある。ヤコブはそのような躓きの存在でもあります。しかし彼は、

「天国を烈しく攻めた」

男です。男は意気だよ！　私の長兄政美は本当に意気の男だった。これに反し、私は意気地無しであった。しかし、天来の信仰がやって来て、聖霊の火が燃えついてから、自分でも不思議な男になった。

●聖霊漬け

小乗的なけちくさいキリスト者というものはあるはずのものでない。大乗的な心根をもちなさい。

「男は根性、女は愛情」

というが、聖霊が臨んで、聖霊漬けの根性となり、聖霊漬けの愛情となったら本ものとなる。断じてパリサイとなるな。泥沼から咲き出る白蓮、紅蓮、金蓮の如くあれ！　創世記第28章第10節から第17節をよくよく身読して、この現実を私たち自身が、ヤコブとなって冥想、夢想の天界に祈入するのです。私は寝るときキリストの中に祈入しますが、夢の中で時折示されます。

とにかく、祈りで天界に梯を架けることは極めて大切なことです。預言者たちは皆祈りの人でした。使徒たちも全くそうでした。況んやキリストは最大の祈りの人です。キリストの弟子たちは12人というけれども、結局本当の弟子は数名しか居なかった。彼らは聖霊が来て本ものになった弟子たちです。そして新約聖書を書かされた。

●往相還相の愛

もう世紀末です。世界第一の本たる聖劇を読み破って御霊の力、御霊の知恵にあずかることです。原始福音時代を質的に再現したい。本当に質的に本ものになれば一人で大丈夫！

「千万人と雖も我れ往かん」

です。

問題は本ものになること。キリストはそういう本ものを求めておられる。ことにもう20世紀は危機的ですから。いい加減な信仰ではもちません。問題は結局、各人の魂の問題に帰するんです。21世紀は無事に来るか来ないかわからん。ノストラダムスの預言を馬鹿にするわけにゆきません。いわゆる右でも左でもない、本当の中道がある。それは福音道です。キリスト道です。ヤコブのように天に通ずる梯子（はしご）を架ける政治家が出現しないか。国際間はイデオロギーではどうにもならぬ。

天界にかかる縦の祈りの梯を横にすると虹の橋となります。虹は美しい愛の象徴です。仏教的に言えば往相還相の愛の力が聖霊に在っての祈りに篭（こも）っているのです。そのような祈りのパウロ、ペテロ、ヤコブ、ヨハネと同質の祈りの人と化して人々を助けまた救わんかな。

1主よ、みもとに　近づかん、
のぼるみちは　十字架に
ありともなど　悲しむべき、
主よ、みもとに　近づかん。
2さすらうまに　日は暮れ、
石のうえの　かりねの
夢にもなお　天を望み、
主よ、みもとに　近づかん。
3主の使（つかい）は　み空に
かよう梯（はし）の　上より
招きぬれば　いざ登りて、
主よ、みもとに　近づかん。
4目覚めてのち　枕の
石を立てて　恵みを
いよよせつに　たたえつつぞ、
主よ、みもとに　近づかん。
5うつし世をば　はなれて、
天がける日　来たらば
いよよ近く　みもとにゆき、
主のみ顔を　仰ぎ見ん。（讃美歌320）